

ダークツーリズム考（２）

～コンテキストのねじれと潜伏キリシタン関連遺産～

On Dark Tourism 2:

Distortion of the Context and Hidden Christian Sites

中村学園大学 流通科学部

山 田 啓 一

1. はじめに

筆者は、「ダークツーリズム考（１）～人類の悲しみの「記憶」を巡って～」において、ダークツーリズムとは何か、ダークツーリズムの対象と分類、ダークツーリズムと記憶を巡る議論、知的活動としてのダークツーリズムと暗黙知、について考察を行った（山田、2018c）。そもそもダークツーリズムに関心を持ったのは、筆者が共編著で出版した『地域イノベーションのためのトポスデザイン』（原田・山田・石川2018）で、トポスの「光」と「影」というコンセプトを提示し、「負の遺産」から学び、「影」を「光」に転換することの重要性を説くにあたり、「ダークツーリズム」の研究が必要になったためである¹。

また筆者は、2019年2月16日に平戸市根獅子町で「潜伏キリシタンと世界文化遺産登録」というテーマで開催されたシンポジウム²において、「コンテキストのねじれと地域デザイン～長崎・天草地方の潜伏キリシタン関連遺産登録～」というテーマで報告を行い、長崎・天草地方の潜伏キリシタン関連遺産がもつコンテキストのねじれとして、布教～禁教～復活のシナリオ、なぜ禁教となったかが語られていないこと等を提示し、世界遺産というブランドが地域を

駄目にする可能性及び健全な地域発展の要件に言及した。このシンポジウムでの報告のため、筆者は2018年9月及び11月に長崎及び平戸にて潜伏キリシタン関連遺産に関する現地調査を行い、さらに追跡調査として2019年3月に島根県津和野町にて現地調査を行った。

本稿では、これらの活動の結果を踏まえ、ダークツーリズムの視点から潜伏キリシタン関連遺産がもつコンテキストのねじれの問題について議論を行う。

2. ダークツーリズムとは

ダークツーリズム (Dark Tourism) は、Foley & Lennon (1996) によって提唱された新しいツーリズムの概念である。ダークツーリズムはいわゆるニューツーリズムの範疇に分類される。ニューツーリズムは、「従来の物見遊山・団体旅行・旅行会社主導のマスツーリズムとは異なるテーマ性・人や自然とのふれあい・体験的要素・個人・地域主導を特徴とする（井上2012）」ものであり、観光立国推進基本法（2006（平成18）年12月制定）に基づくもので、国土交通省観光庁によれば、エコツーリズム、グリーンツーリズム、文化観光、産業観光、ヘルスツーリズム、その他とされているが、ダークツーリ

1 筆者は原田・山田・石川（2018）の中で、原発と公害に関する論考を提示したが、その研究途上でダークツーリズムの文献調査が必要となった（井出2013a、2013b）。

2 地域デザイン学会九州・沖縄地域部会、九州総合研究所及び平戸市根獅子集落機能再編協議会と共催。

ズムはこの中には含まれていない（井出2018a）。また、観光学系の学会でもまだ市民権を得ているとは言い難いのが現状である（井出2018a, p.227）。

このような背景をもつダークツーリズムであるが、その定義は一体どのようになされているだろうか。提唱者である Foley & Lennon (1996) では「ダークツーリズムは本物および商品化された死と災害の遺跡の紹介と消費を含む現象のために採用された用語」と定義されたが、その後いくつかの定義がなされ現在に至っている。ダークツーリズムの定義の詳細な議論は、山田 (2018c) でなされているので、ここでは結論として「人類の悲しみの記憶を巡る旅（井出2018a, 2018b）」と定義することにする。

ダークツーリズムには、広義のものと狭義のものがあると考えることができる。井出 (2018b, p.15) によれば、Lennon & Foley (2000) はダークツーリズムの核心にポストモダン的な意義を据えており、「近代社会の矛盾の中に生きる我々が、その矛盾を捉え直すための身体的な方法論」としている。しかし、「人類の悲しみの記憶を巡る旅」という定義からは、近代化にかかわるものだけでなくより広い歴史や出来事等にかかわるものとされなければならない。そこで、ここでは前者を狭義のダークツーリズム、後者を広義のダークツーリズムとし、狭義・広義の断りがない限り、広義のダークツーリズムを指すものとする。

ダークツーリズムの目的は、社会的な目的と個人的な目的の二つがあると考えられる（山田2018c）。社会的な目的は「ダークツーリズムを通じて改めて犠牲者を追悼するとともに、過去の傷ましい歴史や負の遺産から学び、これらの記憶を風化させることなく、二度と同じことを繰り返さないという反省や教訓にすること（山田2018c, p.3）」であり、個人的な目的は「個人的な好奇心、知的欲求を満たすこと（山田2018c, p.3）」である。

ダークツーリズムの特性としては、「オンデマンド性」と「悲しみの記憶を体感すること」の二つがあると考えられる（山田2018c）。「オンデマンド性」からはまず「関心もしくは興味をもつこと」が必要であり、つぎに「積極的に情報や知識を取得すること」が必要である。また「悲しみの記憶を体感すること」からは「現地で体験すること」すなわち「体験学習」が重要となる。

以上のようなことから、ダークツーリズムの方法論は「自らが関心や興味を持ち、自分で情報や知識を獲得し、現地で体験学習を行うこと」となる。このことからダークツーリズムには、促進型ツーリズム（あらかじめ事前学習を行っておき、現地での体験を通じてその学習を促進させる）と発見型ツーリズム（関心や興味を持つが、事前学習は行わずに現地に赴き、そこで情報や知識を獲得しながら体験学習を行う）の二つに分類することができるが、実際には両者の混合型（ハイブリッド型）となるであろう。

ダークツーリズムは、地域資源の「影」の部分から学び、反省し、誓うという点で、地域資源の正しい表現が必要であり、ことさら「光」を強調したり、「影」を隠したりして美化したり、逆に「影」を強調することは避けなければならない。「光」か「影」かは受ける側が判断すべきものであり、提示する側はすべて事実を正しく伝えることが大切であろう。しかし、往々にして物事は提示する側によって捻じ曲げられ、都合の悪いことは改ざんもしくは隠蔽されるということが起こる。そもそも「歴史は時の為政者によって自己の正当性を示すために作られる」という側面を持つことが指摘される。ここに本稿で取り上げる「ねじれ」の問題が生じることになる。但し、「ねじれ」ているか否か、そしてどのように「ねじれ」ているかについては、最終的には受け取る側の受け取り方、意味や価値において決定されるので、できるだけ事実に基づいた情報提供が大切であると思われる。

3. 地域デザインにおけるトポス概念とコンテクスト

地域をデザインする際に、地域資源（地域に存在する特有の経営資源として、特産品や伝統的に承継された製法、地場産業の集積による技術の蓄積、自然や歴史遺産といった文化財など³⁾）あるいは地域資源の集積の内容（コンテンツ）ではなく、それらをもつ歴史や文化、政治・経済・社会的な背景といった文脈（コンテクスト）を考慮することが大切である。

地域デザインは、このように地域資源がもつコンテクストを単体もしくは組み合わせで地域価値の発現を行い、それをベースとして具体的な地域戦略を描き、実行していくことにより、効果的な地域振興を図ろうとするものである。

われわれは、このようなコンテクストを有する地域資源あるいは地域資源の集合をトポスと呼ぶ（原田2014、原田・山田・石川2018）。トポスとはそもそも「場所」を意味する哲学用語であるが、地域デザインにおいては場所やモノといった「コンテンツ」だけでなく、その場所やモノがもつ固有の特性・意味・価値といった「コンテクスト」をも有するものとしている。

このトポスが有するコンテクストとは「文脈」のことを指すが、例えば「餅の上にこし餡をのせた餅菓子」がコンテンツであるのに対し、「赤福餅」は伊勢参りの代表的な土産物であり、「いまからおよそ300年前の宝永4（1707）年に誕生し、形は伊勢神宮流域を流れる五十鈴川のせせらぎをかたどり、餡につけた三筋の形は清流、白いお餅は川底の小石を表して⁴⁾」おり、「赤心慶福（赤子のような、いつわりのないまごころを持って自分や他人の幸せを喜ぶ）」すなわち「神宮参拝者の心のあり様を表わした言葉」と

いう意味をもつ⁵⁾、というのがコンテクストであるということができる。

4. トポスのもつ「光」と「影」～弁証法的発展～

原田・山田・石川（2018）で、われわれは地域デザインの対象となるトポスには「光」と「影」があることを論じた。そしてコンテクスト転換により「影」を「光」に変えることより、地域資源の価値を発現することを提案した。この「影」から「光」へのコンテクスト転換は2つの種類がある。一つは、戦争や災害などによる甚大な被害の歴史によるものであり、もう一つはいわゆる悪所とよばれるものである。後者は、例えば大都市には歓楽街や遊郭などの「影」の部分があり、「光」の部分の発展には「影」の部分の存在が大きく寄与することを意味する。いずれにせよ、地域資源には「光」と「影」の二面性があり、地域資源の価値発現はその二面性を抜きにしては半減してしまうということになる。平たくいえば、「きれいごと」や「たてまえ」だけでは地域資源の有する価値は浅薄なものになってしまうのであり、地域価値の発現には「光」と「影」の二面性を考え、「影」から「光」へのコンテクスト転換を図ることを考慮することが有効であると考え。例えば、世界遺産に登録された明治産業革命遺産では、日本の近代化を支えた点が強調されているが、日本の近代化すなわち産業化には足尾鉍毒事件や水俣病をはじめとする「公害」等の負の遺産も存在する。またそもそも明治維新以降の日本の近代化政策も富国強兵及び脱亜入欧を目指し、吉田松陰の『幽囚録』で主張された領土拡大志向⁶⁾が最終的に第二次世界大戦に結びついたこ

3 中小企業庁（2007）、p.54。

4 <https://www.akafuku.co.jp/product/oribako/>、2019年4月6日参照。

5 <https://www.akafuku.co.jp/company/>、2019年4月6日参照。

6 幽囚録では、軍備を整え、北海道を開墾し、諸藩主に統治させ、隙に乗じてカムチャッカ、オホーツクを奪い、琉球、朝鮮を従わせ、北は満州から南は台湾・ルソンの諸島まで一手に収め、次第次第に進取の勢いを示すべきである。その後には人民を愛し、兵士を育て、辺境の守備を怠らなければ、立派に国は建っていくと説いている（奈良本2013、p.159を筆者が要約）。

とも否めない。こうした「影」の部分にも触れることで、トポスに深みが与えられるのである。なお、明治産業革命遺産については、狭義のダークツーリズムと関連する問題であるので、別の機会に詳細に論じることにしたい。

5. コンテキスト転換とねじれ

地域デザインを行うにあたって、地域資源や地域資源の集合がもつコンテキストを意図的に(戦略的に)転換することを「コンテキスト転換」という(山田2018b)。例えば、事故や災害、戦争などの暗い過去の出来事から学び、そのようなことが二度と起こらないようにする(あるいは起こさないようにする)といった「影」から「光」への転換(原田・山田・石川、2018)やダークツーリズムから学ぶ(井出、2018)というのが、コンテキスト転換の例である。

しかし、時としてコンテキスト転換が、本来あるべきコンテキストに対して何らかの理由により異なるコンテキストとして発現されてしまうことが生じる。これを「コンテキストのねじれ」と呼ぶことにしよう。コンテキストのねじれはつぎの三つの場合に生じるものと考えられる(山田、2018b)。

- ①コンテキストを表現する言葉が多義性を有する場合に意図するコンテキストとそれを受け取る側との間で解釈に乖離が生じる場合
- ②地域資源の本来のコンテキストと異なる先行イメージが広まってそれが既成コンテキストとして受容されている場合
- ③地域資源が本来持っている歴史や文化、政治的・経済的・社会的な背景から導き出されるコンテキストと、地域デザインにおいて戦略的に創出されるコンテキストとの間に乖離が生じる場合

コンテキストのねじれ現象は、地域コンテキストの中に矛盾を内包するものであり、健全な地域振興を促進するためには、ねじれ現象を解消することが必要である。ねじれの解消法には

つぎの3つの方法がある(山田2018b)。ここで、本来あるべきコンテキストの許容範囲(ねじれを生じさせない範囲)を仮に「ストライクゾーン」と呼ぶことにする。

①ストライクゾーンを明確にする

コンテキストを表す言葉が多義性をもつ場合、定義を限定して多義性を縮減する。

②ストライクゾーンを外さない

戦略的なコンテキスト転換を行う際に、ストライクゾーン(本来のコンテキスト)を大きく逸脱しないこと、すなわちストライクゾーンがもつ正当性(多くの人びとの価値観や期待あるいは当たり前のこと)やレピュテーション(評判)を裏切らないことが大切である。

③ストライクゾーンを書き換える

どうしてもストライクゾーンを外さなければならないとき、コンテキストに新しい意味づけをしたり、新たなコンテキストを創出したりして、ストライクゾーンを書き換えることが必要となる。この場合、新しいストライクゾーンに正当性やレピュテーションが必要となるが、これらはストライクゾーンを書き換える者が決定するのではなく、受け取る側によって決定されることに留意しなければならない。すなわち、新しいストライクゾーンが人びとによって正当である、あるいは良い評判を生み出すものでなければ、新しいストライクゾーンは人びとに受け入れられないことになる。

6. 長崎・天草地方の潜伏キリシタン関連遺産の事例研究

(1) 概要

2018年6月にバーレーンで開催されたユネスコの世界遺産委員会で「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」を世界文化遺産に登録することが認められた。これはもともと「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」として申請されたものであったが、国際記念物遺跡会議(ICOMOS: International Council on

Monuments and Sites、以下「イコモス」)の「禁教期に焦点を当てるべき」という指摘がなされたため、一旦取り下げ、改めて「布教～禁教～復活」というシナリオを描き、「長崎の教会群」を「長崎と天草地方の潜伏キリシタン」に戦略的にコンテクスト転換を図り、再挑戦を行ったものである。

その結果、①原城跡⁷、②平戸の聖地と集落(春日集落と安満岳)、③平戸の聖地と集落(中江ノ島)、④天草の崎津集落、⑤外海の出津集落、⑥外海の大野集落、⑦黒島の集落、⑧野崎島の集落跡、⑨頭ヶ島の集落、⑩久賀島の集落、⑪奈留島の江上集落(江上天主堂とその周辺)、⑫大浦天主堂、の12カ所が世界文化遺産に登録された⁸(イコモスの指摘前後の比較は巻末附録1を参照)。

(2) 潜伏キリシタンとは何か

一般に禁教によって密かに信仰を守り続けた人びとを「隠れキリシタン」と呼んでいるが、今回の世界文化遺産登録では「潜伏キリシタン」という呼称が使われている。なぜ取り立てて「潜伏キリシタン」という呼称が使われるようになったのであろうか。

田北(1954)では、ザビエルの布教開始から禁教に至るまでの信者をキリシタン、禁教における信者を潜伏キリシタン、解禁後にカトリック教徒となった者を復活カトリック信者、解禁後もキリスト教徒にならなかった者を潜伏キリシタンとしている(p.8)。これに対して、宮崎(2001、2018a、2018b)は、禁教期における信者を潜伏キリシタン、解禁後に改めてキリスト教徒になった者を復活キリシタン、解禁後もキ

リスト教徒にならなかった者をカクレキリシタンと呼んでいる⁹。

(3) コンテクストのねじれ

今回の世界文化遺産登録には三つのコンテクストのねじれが生じていることを指摘しなければならない(山田2018b)。

①意図するコンテクストとそれを受け取る側との間における解釈の乖離によるコンテクストのねじれ

今回登録された12の文化遺産のうち、天草の崎津集落、外海の出津集落・大野集落、黒島の集落、野崎島の集落、頭ヶ島の集落、久賀島の集落、奈留島の江上集落、大浦天主堂の9カ所に禁教期には存在し得なかった天主堂がある(これらはいずれも「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」として当初世界遺産に申請したものに含まれている)。

しかし、潜伏キリシタン関連遺産すなわち禁教期におけるキリシタン関連遺産というイメージからすれば、キリスト教の立派な教会があることは単純に考えてもコンテクストのねじれがあることを指摘できる。

これは、当初予定していた教会群(及び天主堂建築¹⁰)を売りにしてこれらの地域を世界文化遺産登録の観光資源にしたいという意図があったのではないかと考えられ、後述する戦略的なコンテクストのねじれと関連しているものと考えることができる。

②隠れキリシタンの先行イメージがもたらすコンテクストのねじれ

隠れキリシタンについては、1966年に出版され、その後世界25か国語に翻訳出版され、映画

7 島原の乱で天草四郎を立てて立て籠もった城

8 <http://kirishitan.jp/>、2019年4月6日、参照。

9 潜伏キリシタンと隠れキリシタンという呼称はあくまで外部からの呼称であって、現地の人びとはそれぞれ異なる呼称を使っていた。例えば、平戸の根獅子では辻の神様、生月では古ギリシタン、旧キリシタン、外海では古ギリシタン、昔キリシタン、しのび宗、五島では元帳、古帳などと呼ばれていた(宮崎2018a、p.24)。

10 長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産インフォメーションセンターによれば、天主堂建築は西洋人神父の指導と日本人大工の伝統的技術が融合したユニークなものとされている(<http://kyoukaigun.jp/about/feature/>、2019年5月28日参照)

や戯曲でもヒットした¹¹遠藤周作の小説「沈黙」のイメージが先行し¹²、生月島や平戸島の隠れキリシタンの実態（本来のコンテキスト）とは異なるものとなっており、ここにコンテキストのねじれが生じている¹³。

③戦略的コンテキスト転換によるコンテキストのねじれ

今回の世界文化遺産登録は、もともと「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」として申請したものをイコモスの「禁教期に焦点を当てるべき」という勧告によっていったん取り下げ、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」として再申請をしたものである。禁教期にスポットを当てながらも当初の教会群を登録するために、「布教～禁教～復活」というシナリオを作り、復活後の関連遺産としてこれらの教会群を復活させようとしたものと考えられ、戦略的なコンテキスト転換が行われたものと考えられる。

しかし、潜伏キリシタン関連遺産というコンテキストからは本来、潜伏キリシタンのもう一つの主流であり、多くの潜伏キリシタンの人びとが存在した生月島、平戸島（あまり重要でない春日集落が一応文化遺産に登録されたが）、解禁後にキリスト教徒にならなかった¹⁴という理由で切り離されてしまった（巻末附録2参照）。ここに大きなコンテキストのねじれが生じてしまったことが指摘される。

（4）最大の問題はなぜ禁教となったのが語られていないこと

長崎、外海、平戸、生月、島原、天草の現地調査を通じて気づいた問題がいくつかあるが、最大の問題は、一部で「島原の乱」が禁教の原因として説明されているものの「なぜ禁教となったのか」が明確に語られていないことである¹⁵。このため、キリシタン弾圧による豊臣秀吉～江戸幕府の時代の日本の後進性、残忍性のみが強調されてしまっている。これは最大の「コンテキストのねじれ」であろう。

織田信長が擁護したキリシタンをなぜ後継者たちが拒絶するようになったのかには、それなりの理由があるはずである。島原の乱が起こったのは1638（寛永15）年であり、徳川幕府が誕生した1603（慶長8）年から35年経っている。また、島原の乱はそもそも領主松倉勝家の重税に喘ぐ農民が起こした反乱であり、その中核がキリシタンであったために、一向一揆と同様の恐れから禁教とされたのである（神田2005）。

キリシタン禁制すなわち禁教についてその背景も含めてきちんと説明しないと、海外からの来訪者とくに欧米のキリスト教信者の人びとに、日本の後進性・残虐性を曝け出すことになり、だから進んだ文明国である欧米の国ぐにが日本人を開明してあげたのだ、あるいは日本人の後進性・残虐性が太平洋戦争での傍若無人なふるまいを行ったのだ、というような解釈を生じさせてしまう恐れがある。

11 ゲッセル（2017）

12 遠藤周作の隠れキリシタンは外海・浦上系（外海・浦上および五島列島）がベースとなっており、貧農で仏教や神道を隠れ藪として信仰を守りとおしたつらくて悲惨なキリシタンというイメージを作り出した。

13 例えば、生月島は捕鯨と漁業の中心地として栄え、経済的には裕福であったことが生月島「島の館」では示されている。中園（2018）は、遠藤周作の「沈黙」が作りだしたイメージをカクレキリシタンの誤解を招く虚構として厳しく批判している。

14 一説ではキリスト教に復活するために、ご先祖様の（位牌も含めて）信仰してきたものを捨てよというような要求がキリスト教側からなされたため、復活しなかったとされる（巻末付録2、広野2018、pp.160-200、宮崎2018、pp.394-395）。

15 長崎県の潜伏キリシタン関連遺産に関するホームページには、豊臣秀吉のパレレン追放令や26聖人の殉教、徳川幕府の政権基盤を確立するための禁教政策に関する大まかな説明は見られるものの、本稿で指摘するような説明はなされていない（<http://kirishitan.jp/histories/his001>、2019年5月28日参照）。

実際に、各地の潜伏キリシタン関連遺産を視察して感じたことは、概して「江戸幕府の弾圧の厳しさ」及び「潜伏キリシタンの悲劇」が強調されていること、いいかえれば日本の後進性や残忍性が強調されていることである。後進国日本を進んだキリスト教と西欧文明によって開化してやったのだというようにも読みとれるメッセージがなされていることである。もっともこの点では明治政府も明治維新によって江戸時代の後進国日本を西欧文明を導入することによって近代化したのだというメッセージを発している(われわれは学校教育でそのように教えられている)ので、日本の多くの人びとは違和感を持たないかもしれない。

キリスト教が禁止された理由は、以下の4つにまとめられると考える。こうした点にも触れ、正しいメッセージを世界に発信していかないと世界文化遺産としての価値が半減するように思われる。また、そもそも日本人のアイデンティティにかかわる問題でもある。

①ポルトガルの植民地化のおそれ

ポルトガルはなぜ日本にやってきたのだろうか。ポルトガルは14世紀末より、エンリケ航海王の主導の下に、アフリカ大陸西岸を南下して、東洋進出を図った。このような動きの中で、キリスト教の普及のためにローマ法王は勅書を出し、ポルトガルに「発見地」の征服・領有・貿易の独占・原住民の奴隷化等を認め、布教保護権と精神的支援等の承認を与えた。さらにやや遅れて海外進出に乗り出したスペインに対しても同様の特権を認可するに至った(清水1981、p.27)。スペインでは1503年に国王フェルナンドがエンコミエンダ制を採用し、現地において先住民のキリスト教化と文明化を図るために、スペイン人に先住民の貢物もしくは賦役をさせる権利を認めるものであり、住民を奴隷化するために利用された(西山2005、p.60)。

イベリア半島のポルトガルとスペインは、1493年にトリデシラス条約を結び、それぞれの

支配領域を分割した。1493年にはヴァスコ・ダ・ガマの艦隊がインドのカリカットに到着、インド航路を切り開いた。1503年～1515年の間に、ポルトガル船隊はインド洋海域の主要な港町をつぎつぎに攻撃し、支配下に納めていった。ポルトガルの支配を受け入れた町には、ポルトガル人が駐留し、堅固な要塞が建設された。ポルトガル人は支配した海域で行わる貿易活動を武力によって支配し、管理しようとしたのであった(羽田2007、pp.54-55)。

ポルトガルの東アジアへの進出は、1511年にマラッカを占領し、1573年にはマカオを獲得して日本との交易の拠点を確保し、1543年に種子島に到着するに至った。さらに1550年ポルトガル船が平戸へ到着し、平戸を開港させ、1562年に横瀬浦、1564年に福田港、1567年には長崎を開港させた。

ポルトガルとスペインの布教事業は、原住民の改宗を目的としていたが、この事業を遂行するために両国はローマ法王から布教保護権(padroado)を授けられていた。これは、両国が征服地で布教するとき、教会に各種の必要な援助を行うかわりに、教会の人事をはじめ本来法王に属する教会行政の裁治を法王に代わって行使しうる特権であり、両国はこの権利に基づいて、征服地のキリスト教化を国策として推進した。

15～16世紀にポルトガルとスペインによって担われた大航海事業は、キリスト教界の拡大をめざすカトリック教会と、異教世界の征服・支配を目的とするイベリア両国の絶対王政との結合を最大の特色としていたとされる(清水1981、p.28)。

さて、日本におけるカトリックの布教は、フランシスコ・ザビエルをはじめとするイエズス会によって推進された。日本におけるキリスト教の布教は、1549年に鹿児島でザビエルによって始められたとされる(五野井1990)。その後、キリスト教は日本全国に広がっていき、最盛時

には信者は30万人に上ったとされる（清水1981、p.36、平川2018、p.47）。このような動きの中で、1580年には大村純忠親子が長崎及び茂木をイエズス会に寄進し、治外法権の実施的なポルトガル領になってしまった。日本の国土の一部が外国人の所領化したことが世の中に広がり、宣教師らの伝道の真意について危惧と不安の念が抱かれるようになった（岩生2019、p.102）。

このような状況下で、1596（文禄5）年にスペインのガレオン船サンフェリペ号が土佐に漂着し、水先案内人フランシスコ・デ・サンダがスペインの植民地化戦略を漏らしてしまったことが、豊臣秀吉に危機感を持たせてしまった¹⁶（松田1972、岩生1974、pp.105-106）。しかし、豊臣秀吉はサンフェリペ号事件以前の1591年にフィリピンに日本に入貢を促し、その翌年ドミニコ会士のフアン・コボが来日し、秀吉に謁見していることから、フィリピンがスペインによって支配されていることをすでに知っており¹⁷、ポルトガルの植民地支配の戦略については周知の事実だったと考えられる。

因みに、スペインのフィリピン植民地支配については、1521年にマゼランの船隊がフィリピンに到着、1565年にレガスピの遠征により植民地化が始まり、1898年に起こった米西戦争によりフィリピンから撤退するまでの333年間スペインの植民地支配が続いたという歴史がある。この間、エンコミエンダ制度でフィリピンを支配したが、これはキリスト教で現地住民を洗脳し、修道会が支配するものであり、これにより現地住民は、貢税・奴隷化・強制労働の三重苦を背負うこととなった。

フィリピンの歴史はこうした植民地支配に対

する抵抗の歴史であり、1898年に独立した後、再び米国の植民地となり、さらに第二次世界大戦中には日本の植民地となり、終戦後によりやうく独立を果たすこととなった（鈴木1997）。日本とフィリピンを単純に比較することはできないが、ポルトガルによる日本の植民地化への危惧は当時の為政者の脳裏にはあったのではないだろうか。

②強引な布教と神社仏閣の破壊

キリスト教は一神教であり、他の宗教を認めず、布教が強引であった。このため、キリスト教徒によって、多くの神社や仏閣が破壊されてしまった（平川2018、pp.77-79）。実際、ザビエルが最初に日本上陸を果たした鹿児島では、このことが反感を呼び仏教側から反対にあい布教の失敗につながってしまったとされる。

③キリスト教内での抗争とアジア進出の旧勢力と新勢力との覇権争い

キリスト教の世界では、16世紀にルターによる宗教改革運動が行われ、カトリックとの間で激しい抗争が繰り広げられた。最終的には、キリスト教界は既存のカトリックと新興のプロテスタントとに分かれることとなった。このような動きの中で、カトリック勢力は、ポルトガル、スペインの海外進出とともに海外に活路を見出すこととなり、その先鋒としてイエズス会をはじめとする布教集団が形成され、交易と布教による植民地支配をめざす戦略が遂行された。これに対して、プロテスタント勢力であるイギリス、フランス、オランダは、交易と布教を切り離す戦略を採用し、東インド会社を設立して海外進出と活動を行った。すなわち、カトリック勢力であるポルトガルとスペインはキリスト教の布教と交易をワンセットにして海外進出を行

16 この件については、当時布教にしのぎを削っていたスペインのフランシスコ会を陥れるためにイエズス会が讒言したという説もある（岩生1974、p.105）。

17 秀吉は朝鮮出兵の前後にスペインのフィリピン総督に服属要求の書簡を送り、またインドのゴアのポルトガル副王に対してもキリスト教布教の禁止を通知していた。また、スペインによるフィリピンの征服を非難した書簡もある（平川2018、p.2）。

い、アジア地域の覇権を握ったが、後発組であるプロテスタント勢力であるイギリス、フランス、オランダはポルトガルとスペインを追い落とす戦略が必要であった。そこで前述のように、交易と布教を切り離し、東インド会社を作って交易のみに専心する戦略を採用した。そして、イギリスとオランダは江戸幕府に対してポルトガル・スペインの目的が布教を通じた植民地化にあることを諫言したとされる(岩生2005、pp.450-466、平川2018、p.8)。

また、カトリックの間でも、日本布教で先行したポルトガル系のイエズス会と後発のスペイン系のフランシスコ会等¹⁸との間で激しい競争が繰り広げられた(渡辺2017)。

なお、オランダ船リーフデ号で1600年に日本に漂着し、その後徳川家康の外交アドバイザーとなったウィリアム・アダムス(三浦按針)の存在が当時の幕府の外交政策に大きな影響を与えたことは否めない。家康がポルトガル及びスペインとの交易と布教を禁止したのは、アダムスの提言があったからであり¹⁹、またその後オランダとイギリスとの間での競争でオランダに軍配が上がったのもアダムスの影響が大きかったことが指摘されている(Milton 2002、Plum 1996)。

④南蛮貿易における人身売買

南蛮貿易は、「中国の島嶼部(1577年以降はマカオ)をハブ拠点として、交易に従事するポルトガル人たちが、インドや東南アジアの諸地域で取引される商品や中国産の生糸・絹織物・薬種などを日本へ運んだもの(ソウザ・岡2017、p.172)」であり、パジェス(1940)によれば、ポルトガルが行った南蛮貿易では日本人の奴隷の人身売買が行われ多くの日本人が海外

へ売られていった(ソウザ・岡2017)。

ソウザ・岡(2017、p.173)によれば、「16世紀のポルトガル人による奴隷貿易は、日本やアジアに限られず、全世界的な現象であった」とされる。その際、奴隷として売買される人間には、キリスト教化すなわち洗礼が行われ、日本においてはイエズス会もこれに関与していたとされる²⁰(ソウザ・岡2017)。これに対して豊臣秀吉は1587(天正15)年に「伴天連追放令」を発し、その中で奴隷売買についても禁止すること命じており、奴隷貿易をイエズス会の問題として捉えていたことが示されている(ソウザ・岡2017、p.174)。

但し、人身売買については戦国乱世の日本では、戦場で勝った側による略奪や奴隷狩り(乱取り)が行われていたこと(藤木2005)を考えると、ポルトガルだけを責めるわけにはいかない。しかし、ポルトガルやスペインが行った奴隷貿易は、カトリック教会も関与し、奴隷の衣服を剥がし烙印を押し、狭い奴隷船の中に押し込めて運搬するなど人を牛馬のごとく扱う厳しいものであり(西山2005)、この点が豊臣秀吉の逆鱗に触れたものとされる(北原2013、p.16)。

(5) 禁教の解除(解禁)か復活か

潜伏キリシタン関連遺産の登録にあたっては、「布教～禁教～復活」というシナリオを設定して活動が展開され、世界遺産の登録がなされているが、「復活」というシナリオのために、改宗しなかった多くの「カクレキリシタン」の人びとが世界遺産の対象から排除されてしまった。

確かに「復活」というのは「キリストの復活」を連想させ、キリスト教関係者にとっては快い響きであろう。またユネスコやイコモスの関係

18 スペイン系の修道会には、この他ドミニコ会、アウグスティノ会があった(渡辺2017)

19 アダムスらが日本に漂着した時、イエズス会はアダムスらを処刑するように幕府に働きかけたことをアダムスは忘れなかった(Milton 2002、Plum 1996)。

20 ポルトガル国王ドン・セバスチャンは1577年に日本人の奴隷取引禁止の勅令を出しているが、奴隷売買はその後も続けられた。日本においてポルトガル人による奴隷貿易やイエズス会の関与が絶たれたのは1598(慶長3)年にルイス・デ・セルゲイラの日本司教着任後に禁止されるに至った(ソウザ・岡2017、p.174)。

者にもキリスト教信者が多く含まれると考えられ、戦略的にも正しい選択であったといえるかもしれない。そもそも、「隠れキリシタン」の研究者の文献においても、世界遺産登録の案件以前から、「布教～禁教～復活」というシナリオが語られており（田北1954、古野1966、片岡1967、宮崎2001、2018a、2018b、中園2015、2018）、このシナリオは当然のこととして捉えられていたのかもしれない。

しかし、筆者のような非キリスト教関係者の目からみれば、「復活」というよりは「解禁²¹」と映るかもしれない。その一つの理由は、明治期になって来訪したキリスト教は、日本の禁教期に大きな変貌を遂げ²²、ザビエルが伝えたキリスト教とは異なるものであり、果たして「復活」といえるのであろうかという点である。

この視点は非常に重要である。なぜなら、「復活」というシナリオのために、「なぜ多くの隠れキリシタンの人たちが解禁になった後、新しいキリスト教に改宗²³しなかったのか」が語られず、切り捨てられてしまっているからである²⁴。新しいキリスト教に入信するにあたってそれまで信じてきたもの（ご先祖様の位牌も含めて）を捨てる必要があったからこそ、多くの人たちはそれが捨てられずに改宗に応じなかったものとするのが自然ではなかろうか。その辺のところも、世界中から来訪して潜伏キリシ

タン関連遺産を訪れる人びとに理解してもらうことは無駄なのであろうか。

また、なぜ明治期になって解禁となったのかについても、「信徒発見²⁵」と欧米から来日したキリスト教関係者のその後の布教努力が強調され、「浦上四番崩れ²⁶」及び「分配預託²⁷」が契機となって、欧米からの圧力によって「解禁」となったことがあまり大きく取り上げられているとはいえない。それがむしろ「布教～禁教～解禁」の正しいコンテキストであると考えられる。

7. おわりに～ダークツーリズムとしての潜伏キリシタン関連遺産～

ダークツーリズムは、地域資源の「影」の部分から学び、その反省から二度と同じ過ちを犯してはならないことを認識し、誓う旅である。

ダークツーリズムとしての潜伏キリシタン関連遺産については、遠藤周作の「沈黙」で表されている厳しい弾圧と悲惨な運命をダークとして捉えることができるが、それにも増して、その背景にあった当時の世界情勢とくにポルトガル、スペインというカトリック国とオランダ、イギリスというプロテスタント国と覇権争い、南蛮貿易のなかで行われていた奴隷貿易（日本人の人身売買）、ポルトガルやスペインさらにはオランダ、イギリスによって植民地化がすす

21 安高（2016）は、「禁教解禁」という言葉を使用している（p.183）。また、大橋（2019）も「解禁」という言葉を使っている。

22 イエズス会が日本で布教を始めたとき、すでに聖書に回帰を求めるプロテスタントが現れ宗教改革が行われていた。

23 そもそも隠れキリシタンはキリスト教徒であったのであるから、「改宗」という表現それ自体が矛盾を含んでいると考えられるが、ここではとりあえず「改宗」という表現を用いることにする。

24 宮崎（2018）によれば、4人の研究者による大正から昭和30年代までのカクレキリシタンの総人口は2万人～3万人弱とされている（p.45）。

25 1865年、浦上村の産婆イサバリナゆりを中心とする潜伏キリシタン十数名が大浦天主堂を訪れ、堂内にいたプティジャン神父に信仰を告白した事件（片岡1967、pp.14-15）。

26 キリシタンを摘発することを「崩れ」、キリシタンが非キリシタンに改宗することを「ころび」という（安高2016）。浦上四番崩れは、江戸時代末期に浦上村（現長崎市浦上町）における3千人を超えるキリシタンの摘発及び明治新政府による強硬な処遇をいい、これが契機となって諸外国からの反対に会い禁教解禁の動きに発展した（安高2016）。

27 信徒発見後に発生した浦上四番崩れで検挙された約3千人の隠れキリシタンの処遇を巡って明治政府が各地に分けて処理を任せた事件。

められた国ぐにの人の苦悩に思いを馳せなければならぬ。

なお、解禁後になぜ多くの隠れキリシタンが改宗しなかったのかについては、キリスト教自体に内在する問題が布教当初より大きく影響している。すなわち、キリスト教の厳格な一神教性であり、他の宗教を認められないという点である。解禁後に隠れキリシタンに求められたのは、もちろん仏教や神道を捨てることであったが、さらにご先祖様の位牌も捨てよとのことが、最大の原因であったと考えられる。

この問題は、現在そして未来につながる問題であり、例えばイスラム教との確執は両者とも厳格な一神教であることに起因していると考えられる²⁸。欧米至上主義、キリスト教至上主義で世界を動かしてきた19世紀～20世紀の戦争の世紀から、21世紀の共生社会への展望を考えると、それぞれの地域の歴史・文化・宗教・政治・経済などの独自性を尊重し、お互いに認め合い、受け入れることが必要であるということに思いが至るとき今回の筆者のダークツーリズム(スタディツーリズム)には大きな意義が認められると考えられる。

本研究を進めるにあたり、平戸根獅子の川上茂次様をはじめ、多くの方々にご支援をいただきました。ここに謝意を表したいと存じます。

参考文献

- 井出明(2018a)『ダークツーリズム—悲しみの記憶をめぐる旅—』幻冬舎。
井出明(2018b)『ダークツーリズム拡張—近代の再構築』美術出版社。
井上史子(2012)「ニューツーリズムの推進に関する取り組みについて」日本LCA学会、2012年8月24日配布資料。
岩生成一(1974)『鎖国』中央公論社。
大橋幸泰(2019)『潜伏キリシタン—江戸時代の

- 禁教政策と民衆』講談社。
片岡弥吉(1967)『かくれキリシタン—歴史と民俗』日本放送教会。
神田千里(2005)『島原の乱—キリシタン信仰と武装蜂起』中央公論社。
北原惇(2013)『ポルトガルの植民地形成と日本人奴隷』花伝社。
五野井隆史(1990)『日本キリスト教史』吉川弘文館。
清水紘一(1981)『キリシタン禁制史』教育社。
Giles, Milton(2002) *Samurai William*, U.K., Hodder Murray (築地誠子訳『さむらいウィリアム—三浦按針の生きた時代』原書房、2005年)。
鈴木静夫(1997)『物語フィリピンの歴史—盗まれた楽園と抵抗の500年』中央公論社。
田北耕也(1954)『昭和時代の潜伏キリシタン』日本学術振興会。
中園成生(2018)『かくれキリシタンの起源—信仰と信者の実相』弦書房。
中園成生(2015)『かくれキリシタンとは何か—オラショを巡る旅』弦書房。
西山俊彦(2005)『カトリック教会と奴隷貿易—現代資本主義の興隆に関連して』サンパウロ。
羽田正(2007)『東インド会社とアジアの海』講談社。
原田保・山田啓一・石川和男編著(2018)『地域イノベーションのためのトポスデザイン』学文社。
平川新(2018)『戦国日本と大航海時代—秀吉・家康・政宗の外交戦略』中央公論社。
広野真嗣(2018)『消された信仰—最後のかくれキリシタン—長崎・生月島の人々』小学館。
Foley, Malcom and John Lennon(1996). “JFK and dark tourism: A Fascination with Assassination,” *International Journal of Heritage Studies*, 2 (4) pp.198-211.
古野清人(1966)『隠れキリシタン』至文堂。
Plum, Claus M.(1996) *Will Adams, Styrmand-Samurai*, Kobenhavn(幡井勉監修・下宮忠雄訳『按針と家康—将軍に仕えたあるイギリス人の生涯』出帆新社、2006年)。
藤木久志(2005)『雑兵たちの戦場—中世の傭兵と奴隷狩り』朝日新聞出版。

28 キリスト教の内部においても、1964年に開催された第二バチカン世界教会会議において展開されたエキュメニカル運動(キリスト教の教会一致促進運動)により、教派を超えた結束が進められ、さらにラテンアメリカ及びフィリピン等における解放の神学の展開やローマ教皇にアルゼンチン出身のフランシスコ氏が就任するなどキリスト教世界における変革(欧米至上主義からの脱却)が進められつつあると考えられる。

- 松田毅一 (1972) 『秀吉の南蛮外交—サン・フェリペ号事件—』 新人物往来社。
- 三浦小太郎 (2019) 『なぜ秀吉はバテレンを追放したのか—世界遺産「潜伏キリシタン」の真実』 ハート出版。
- 宮崎賢太郎 (2001) 『カクレキリシタン—オラシオ—魂の通奏低音』 長崎新聞社。
- 宮崎健太郎 (2018a) 『潜伏キリシタンは何を信じていたのか』 角川書店。
- 宮崎賢太郎 (2018b) 『カクレキリシタン—現代に生きる民俗信仰』 角川書店。
- 安高啓明 (2016) 『浦上四番崩れ—長崎・天草禁教史の新解釈』 長崎文献社。
- 山田啓一 (2018a) 「潜伏キリシタンと地域デザイン」 地域デザイン学会第7回全国大会予稿集。
- 山田啓一 (2018b) 「コンテクストのねじれと地域デザイン」 日本情報経営学会第77回全国大会予稿集。
- 山田啓一 (2018c) 「ダークツーリズム考 (1)」 ビジネス科学学会第7号、pp.1-11。
- ヴァン・C・ゲッセル (2017) 「『沈黙』と『SILENCE』—英語圏での解釈と評判について」 遠藤周作文学館企画『遠藤周作と「沈黙」を語る』、長崎文献社、47~71頁。
- ルシオ・デ・ソウザ、岡美穂子 (2017) 『大航海時代の日本人奴隷—アジア・新大陸・ヨーロッパ』 中央公論社。
- Lennon, John, and Malcom Foley (2000). *Dark Tourism: The Attraction of Death and Disaster*, London, UK: Continuum Publishing.
- 渡辺京二 (2017) 『バテレンの世紀』 新潮社。

附録1 イコモスの指摘前後の登録遺産の比較

指摘前	指摘後
長崎の教会群とキリスト教関連遺産	長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産
1. 日野江城跡（南島原市）	1. <u>原城跡</u> （南島原市）
2. <u>原城跡</u> （南島原市）	2. <u>平戸の聖地と集落</u> （春日集落と安満岳）（平戸市）
3. <u>平戸島の聖地と集落</u> （平戸市）	3. <u>平戸の聖地と集落</u> （中江ノ島）（平戸市）
4. <u>天草の崎津集落</u> （天草市）	4. <u>天草の崎津集落</u> （天草市）
5. <u>出津教会堂と関連施設</u> （長崎市）	5. <u>外海の出津集落</u> （長崎市）
6. <u>大浦天主堂と関連施設</u> （長崎市）	6. <u>外海の大野集落</u> （長崎市）
7. <u>旧五輪教会堂</u> （五島市）	7. <u>野崎島の集落</u> （小値賀町、五島列島）
8. <u>旧野首教会堂と関連施設</u> （小値賀町）	8. <u>頭ヶ島の集落跡</u> （新上五島町、五島列島）
9. <u>黒島天主堂</u> （佐世保市）	9. <u>奈留島の江上集落</u> （五島市）
10. <u>頭ヶ島天主堂</u> （新上五島町）	10. <u>久賀島の集落</u> （五島市）
11. <u>大野教会堂</u> （長崎市）	11. <u>黒島の集落</u> （佐世保市）
12. <u>田平天主堂</u> （平戸市）	12. <u>大浦天主堂</u>
13. <u>江上天主堂</u> （五島市）	

注）下線を施したものは、イコモス提言前後で変わっていないものを示す。ただし、平戸の聖地と集落においては、春日集落と安満岳、中江ノ島に限定され、根獅子と生月島は外された。

附録2 根獅子の川上茂次氏からのメール（抜粋）

復活した隠れたちはほんの一部であり、平戸島の根獅子や獅子や飯良、生月など、特に世界遺産の一角の春日ですら復活したものは皆無に近いのですから。獅子に3件いたそうです。根獅子には復活したものはいませんでした。

明治26年生まれの祖父茂次作は水役でしたが、祖父と祖母、根獅子の祈祷寺であった照観寺住職も私が中学生の頃、このことを質すと必ず、『唐天竺から徳の高い坊様が来て耶蘇教を広めた。期待して信仰に入った先祖は当初大変喜んでいましたが、どうも従来 of 仏教ではないぞ、おかしいぞ』と思うようになった。しかし殿様からキリシタンに成れと言われればはむかう事も出来ずに入った。長い弾圧の果てに復活せよ、と西洋の坊様から言われたが、お前は今頃やってきて何を言うか、長い間命がけで守ってきた我々の信仰こそ本物で、今頃出てきてそれは違うから入り直せとは何事か」とフランス神父を追い返したというものでした。

宮崎賢太郎さんにはこのような話をよく聞かせたものでした。彼は登録後数日後のシンポジウムで「平戸の世界遺産のコアは根獅子や生月の山田ではないか。候補選定に課題が残る」というような発言があったと聞きますが、私も同感です。煙のような無形の資産を有形遺産本位の世界遺産登録が春日集落となるのは解せない問題です。藤原恵洋さんは委員でありながら官と学が進める登録過程を空中戦といい、住民不在はおかしいと言っていました。

筑波大学の山中弘さんは根獅子のうちによく来ては、世界のキリスト教世界に異端の宗教であるカクレキリシタンがどんな貢献をしたか、この部分が鮮明に描けなければ登録は難しいと指摘していましたが、それは長崎の教会群の看板を下ろされて改訂しましたね。

世界遺産から外された殉教者おろくにん様の里 住人 川上茂次